イスラーム期における都市ハランの宗教
――イブン・アン＝ナディームの『目録の書』を中心に――

江原　聡子

I. 序論　ハランのサービア教徒

北シリアの古代都市として定義づけられるハラン Ḥarrān は，古代メソポタミア文明期から紀元 13 世紀まで 3 千数百年に及ぶ歴史を持つ。古代メソポタミアにおいてハランは月神シン Sīn の宗教センターとして有名であり，「創世記」ではアブラハム Abraham が滞在した地とされ（11: 31-12: 3），イスラーム期には「サービア教徒の都市」madīna al-Ṣābiya (al-Dimashqī 1865, 191）として知られていた。

イスラーム期のハランはムスリムの征服を受けた非ムスリムの都市ながら，ウマイヤ朝 (661-750）に重要視され，同朝末期には首都と定められた。アッバース朝期（750-1258）のバグダードでは，サービト・イブン・クッラ Thābit ibn Qurra (826-901）のようなハラン出身のサービア教徒の学者が活躍し，彼のゆえにサービア教徒はカリフに近接し，その地位が高められた（al-Nadīm 2014, 227f.）。

イスラームの聖典『クルアーン』にはサービア教徒と呼ばれる人々がユダヤ教徒，キリスト教徒と並ぶ啓典の民として言及されている（2: 62, 5: 69, 22: 17）。イスラーム期にハラン人がサービア教徒を名乗っていたため，ハラン研究はサービア教徒 al-Ṣābi'ūn とは何者かという疑問から出発した。しかしながら「サービア教徒」の概念も用語も混乱を極め，学者や著述家の間でさまざまの説が出された [1]。

サービア教徒に関しては，D. A. フヴォルゾーン（1819-1911）によって一応の結論が出された。彼によれば，元来のサービア教徒とは近現代にマンダ教徒と呼ばれる人々の先祖である下イラクの，洗礼者ヨハネ Ἰωάννης ὁ βαπτιστὴς（生没年不詳）を奉ずる「洗礼派」の人々であった（Chwolsohn 1856, vol. 1, 100-138)。しかしながらハラン人が同教徒を名乗っていたことは事実である [2]。さらにハランのサービア教徒の学者たちはアラビア語，シリア語，ギリシア語の能力を駆使した訳業等の活動を通じ，ギリシア思想をイスラーム世界に伝える役割を担った。これら 3 言語に堪能なサービトは，自らが異教の文化伝統の代表者であることを誇りに思っていた（Bar Hebraeus 1890, 168f.；cf. Chwolsohn 1856, vol. 1, 177-80)。やがてイスラーム文化を介してヨーロッパに伝わった古代の思想はルネサンスという思潮の原動力となっていく。ハランのサービア教とはどのような宗教であったのか。ハランという一都市の宗教の信徒が古代とイスラーム，ヨーロッパを結ぶ仲介者ともなったことを考えれば，この宗教の考察は意義あることと思われる。よって本論においてはハランのサービア教の考察を行い，「サービア教徒の都市」ハランの宗教の様相の一端を探り出すこと

を目的とする。

方法論としてはハランのサービア教についての主にムスリム学者の証言を中心に分析する。特にイブン・アン＝ナディーム Ibn al-Nadīm (998 没) の『目録の書』*al-Fihrist* (987/8 完成) 第 9 章と，ビールーニー al-Bīrūnī (973-1048) の『古代諸民族年代記』*Āthār al-Bāqiya ʻan al-Qurūn al-Khāliya* (1000 頃) 第 18 章中には，祭暦を含めハランのサービア教徒の祀る神々が詳細に記されているため，これらの両資料を分析する。

イブン・アン＝ナディームは 10 世紀バグダードの書誌学者で，『目録の書』は当時のバグダードに存在した書物の目録であり，全 10 章それぞれのテーマ分けに従って書物の記事の一部が引用され，イブン・アン＝ナディーム自身の意見も述べられている。ペルシア人博学者ビールーニーの『古代諸民族年代記』には様々な文化文明の暦が，数学，天文学，歴史の知識と共に記されている。ただし前者の内容のほうが詳細であるため，本論では『目録の書』第 9 章を中心に採り上げ，両資料に登場するハランの神々や神的名称を中心に検証を行う。

II. 先行研究

イスラーム期のハランの神々の本格的検証はフヴォルゾーンに始まる。彼の『サービア教徒とサービア教』(Chwolsohn 1856) は今日でもサービア教研究の必読書である。同書中には『目録の書』やマスウーディー al-Masʻūdī (896-956) のハラン「異教」についての記事の彼自身の独訳と注が含まれ，膨大な資料が用いられているが，ビールーニーの著述に触れていないところなど，今日から見れば不完全の感は免れない。

20 世紀に入ると，楔形文字の解読等により深みのあるハラン研究が可能となった。最後のバビロニア王ナボニドス Nabonidus (在位：前 555-539) の石碑の発見から，「月神の都市」としてのハランが注目され，イスラーム期の「サービア教徒の都市」という側面と合わせてハランを検証する研究者が現れるようになった。

『目録の書』を『フィフリスト』(Dodge 1970) として英訳したイスラーム学者の B. ドッジ (1888-1972) は，ハランの神々の詳細な分析を試みているが，古代メソポタミアの事例については一次資料の楔形文字文献に全く触れていない。

T. M. グリーンは『月神の都市：ハランの宗教伝統』(Green 1992) により「月神の都市」としてのハランを通史的に論じ，さらにハランの神々の分析も行っている。しかしながら同書はハランが月神の都市であることを前提にしているため，特にイスラーム期のハランについてそのように言えるのかを明確にしていない。

Ş. ギュンデュズ (1960-) は『生命の知識：マンダ教徒の起源と初期の歴史，マンダ教徒とクルアーンのサービア教徒，ハラン人との関係』(Gündüz 1994) においてマンダ教徒とハランについて精査したが，ハランについては二次的な扱いであった。またその中で，ハ

ランの神々や神的名称に関する検証も行っているが，注（16）で示すようにアッカド語の独立形と結合形の区別がついていなかったり，アッカド語の複数形とロゴクラム（偽シュメル語表記）の関係についても，EN DINGIR^{meš} か *bēl ilāni*（いずれも「神々の主」の意。前者はロゴグラムを用いている。後者はアッカド語読み）とすべきところを *bēl ilāni*^{MEŠ} と表記するなど（Gündüz 1994, 194），古代語の知見の不足するところがある。

これらの先行研究はいずれもイスラーム期のハランの神々について考察を行っているが，本論とは研究姿勢や目的が異なっており，上記のように不十分な点もある。本論ではそれらを踏まえつつ，ハランの神々の起源や本来の神名，その構成する万神殿を表にまとめて全体の様相を示すことを主軸として，イスラーム期のハランの宗教伝統を読み解いてゆく。

III. ハランの万神殿（パンテオン）

ハランのサービア教徒についての証言には次のものがある。

『目録の書』第9章では，アッバース朝カリフ・マアムーンがハラン人を「偶像の奴隷」‘abada al-awthān と呼んでいる（al-Nadīm 2014, 362）。ビールーニーは「ハランは月に属する」（al-Bīrūnī 2000, 174）と述べ，ハラン人はヒジュラ暦228年（西暦842/3年）以後サービア教徒を名乗る以前は，「真の信仰を持つ者」al-ḥunafā’[3]，「偶像崇拝者」al-wathanīya，「ハラン人」al-Ḥarrānīya と呼ばれていたとする（al-Bīrūnī 2000, 283）。さらにビールーニーは「彼ら（=ハラン人）は星々とその偶像たちとその神殿に捧げものをし，彼らの祭司と誘導者たちによって生贄を捧げる。彼らはそれにより，近い未来に起こることとそれについての問いへの答えを引き出す」とする（al-Bīrūnī 2000, 175）。シリアの地理学者ディマシュキー al-Dimashqī（1256-1327）は『時代の精華』*Nukhba al-Dahr fī ‘Ajā’ib al-Barr wa al-Baḥr* において，サービア教徒には2種類あり，一方は星辰を崇拝し，もう一方は偶像を崇拝するとし，さらにサービア教徒の偶像崇拝者が，偶像は天体の霊魂を表現するものと主張していると述べる（al-Dimashqī 1865, 44）。またウマイヤ朝期の人物と思われるハラン人預言者バーバー Bābā（生没年未詳）はアラビア語とシリア語で来たるべきハランの栄光を宣べ伝えたが，その黙示文中でハランのことを「シンの都市」*mdītteh d-Sîn* と呼んでいる（Dionysius Bar Ṣalībī 1904, 49）。シンとは古代メソポタミア文明期におけるハランの主神シンのことであろう。ダマスクス生まれのディマシュキーは，地理的有利さからハランについてより正確な情報を得ていたものと思われ，バーバーに至ってはハランの人物である。これら4者の証言から，ハランのサービア教には月神シン崇拝，星辰崇拝，偶像崇拝という性格が浮かび上がってくる。

1）古代メソポタミア文明期

現在分かっている，ハランのシンに関する最古の記述は前18世紀のマリ文書の記事（ARM

26/1, no. 24: 10-14）であり，この神は前2-1千年紀において国家間の条約の保証神として呼び出され，アッシリア帝国の西方政策の守護神とされる等の権威を誇っていた（Pongratz-Leisten 1995, 551, K.8759+Rm.133+Rm.288: 14; SAA 10 174; 江原 2021. 3, 136, 139, 145 n. 19, 146）。ハランのシン崇拝はバビロニア最後の王ナボニドスの時代まで確認することができる（Schaudig 2001, 486-499, 500-513）。

最後のバビロニア王ナボニドスはハラン出身と思われる母の影響を受けたためか，バビロニアの最高神マルドゥク *Marduk* に替えてシンを万神殿の頂点に戴く国家造りを企図し，ハランのシン神殿エ・フルフルを再建した人物である（Beaulieu 1989, 43）。彼は同神殿にシンを顕彰する石碑を立てており，同碑文中の神々はおそらく古代メソポタミア文明末期のハランの万神殿を最も良く反映していると考えられる。以下，シンと他の神々との関係性を示すと思われる箇所を中心に碑文より抜粋する[4]。訳文中の「　」は碑文の文字が一部破損している箇所，［　］は文字がすべて破損しているが，読みを予想できる箇所を示し，（　）は引用者による挿入である。

> シン，神々の王，主［たち］の中の主の言葉によって，天上に住まう神々と女神たちはシン-ナンナルの命令を完璧に遂行し，シャマシュ，イシュタル，アダド，ネルガルが私の安全と生命を守るよう［定］めた。
>
> （Ḫarrān Inscription(s) of Nabonidus 1: I 27-31［Schaudig 2001, 489］）

> シンの命令で天地の運河の番人アダドは，雨水を彼ら（＝アッカドとハッティの人々）に飲ませ（＝雨水をもって彼らを潤し）（中略）「シン」とイシュタル，神力（しんりき）の女主（おんなあるじ）――敵対も和平も彼女（＝イシュタル）なしには国にありえず，武器は振るわれることがない――の言葉によって[5]，彼女（＝イシュタル）はその（＝イシュタルの）手を彼らの「上に」「置いた」。（Ḫarrān Inscription(s) of Nabonidus 1: I 36-42［Schaudig 2001, 490］）

> シンの言葉によって，ネルガルは彼ら（＝反逆したアラブ人）の武器を粉々に打ち砕き，彼らはすべて，私の足元に屈服した。
>
> （Ḫarrān Inscription(s) of Nabonidus 1: II 1-2［Schaudig 2001, 490］）

> シン，神々の主，（月の）第1日にその（＝シンの）名はアヌの三日月刀である[6]。あなた（＝シン）は天を鷲摑み，地を破壊する。（シンは）アヌの神位の祭儀秩序を（己の上に）集め，「エンリル」の神位の祭儀秩序を完璧に遂行し，エアの神位の祭儀秩序を所有している。彼の手中には天のあらゆるすべての祭儀秩序がある[7]。
>
> （Ḫarrān Inscription(s) of Nabonidus 1: II 14-19［Schaudig 2001, 491f.］）

私はシン，ニンガル，ヌスク，サダルヌンナの手を取り（中略）（彼らを）永［遠］の高座に導き入れ，住まわせた。

（Ḥarrān Inscription(s) of Nabonidus 1: III 21-24［Schaudig 2001, 495］）

ナボニドスのハラン碑文に登場する神々をその順に示すと，シン，シャマシュ *Šamaš*，イシュタル *Ištar*，アダド *Adad*，ネルガル Nergal，アヌ *Anu*，エンリル Enlil，エア *Ea*，ニンガル Ningal，ヌスク Nusku，サダルヌンナ Sadarnunna の 11 神である。ハランの主神シンは碑文中ではシュメル名のナンナルとも呼ばれる。シャマシュはシンの息子で太陽神，正義と神託を司る（Krebernik 2009-2011, 599-611; Schaudig 2001, 490f.）。イシュタルは愛と戦闘の女神で金星とされる（Seidl 1976-1980, 74-89）。アダドは天候神（Ebeling 1928a, 22-26），ネルガルは災厄と冥界の神で火星を象徴とし（Wiggermann 1998-2001, 215-223），アヌはアッシリア・バビロニアの天空の神で神々の王（Ebeling 1928b, 115-117）。エンリルは風と嵐を操り，大洪水をもたらすと考えられたシュメル以来の大神である（Nötscher 1938, 382-387）。エアは知識や魔法を司るシュメルのエンキ神のアッカド名（Ebeling 1938, 374-379），ニンガルはシンの妻であり，その名はシュメル語で「偉大なる女主」を意味する（Zgoll et al. 1998-2001, 352-359）。ヌスクは光と火の神で，シンの息子ともされ（Streck 1998-2001, 629-633），サダルヌンナはヌスクの妻である（Streck 1998-2001, 630）。

この碑文において，月神シンはメソポタミア神話の他の強大な神々を従わせ，天と地を支配する神であった。

2）初期キリスト教時代

古代メソポタミア文明期以降ハランのシンは，初期キリスト教時代のシリアのキリスト教徒の書物『アッダイの教え』（4 世紀後半，作者不詳）とサルグの司教ヤコブ（451-521）の『偶像の凋落についての説教』において，当時のハランの万神殿の一端らしきものの中に見つかる。『アッダイの教え』には「ハランの住民のように，バト・ニッカルを崇める者たちがおり（中略）ハランのほかの住民のように太陽と月をも崇める者たちがいる」（Phillips 1876, 24）とあり，『偶像の凋落についての説教』には「彼（＝サタン）は，シン，バアル・シャメンとバル・ネムレによって，犬たちを連れた我が主，タルアタとガドラト女神によってハランを惑わせた」（Jacques de Saroug/Martin 1876, 110）とある。

『アッダイの教え』の述べるバト・ニッカル *Bath Nikkal* は，おそらく古代メソポタミア神話の金星神イシュタルのことを指している。バト *Bath* は「娘」を意味するヘブライ語 *bat* やシリア語の *barṯā*（構成形 construct state: *baṯ-*）と同語根の語であり，ニッカル *Nikkal* はシンの妻ニンガルのことである[8]。バト・ニッカルとは「ニッカル（ニンガル）の娘」の意であり，ニンガルとシンの娘はイシュタルである。さらにハラン人は月と太陽を拝んでいるとされている。この月はシン，太陽は古代メソポタミア神話の太陽神シャマシュと

考えられるだろう。

『偶像の凋落についての説教』において，サルグのヤコブはハランの月神に言及し，シン Sîn という神名も承知していた。バアル・シャメン *Baʿal shamên* は「天の主」の意で，西セム語系の天候神などを指す神名であり，フェニキア人の間でも広く崇拝された。H. J. W. ドレイフェルスによれば，古代中東の地域万神殿の頂点にいる神に与えられる神名であり，この神はシリアで広く崇拝された（Drijvers 1980, 44）。*Baʿal shamên* はハランではシンと同一視されていた（Drijvers 1980, 128）。バル・ネムレ *Bar Nemre* は，*bar* は「息子」を意味するシリア語であり，*Nemre* のアッカド語の語根「輝く」*nmr*（ただしこれは二次的な語根で，本来の語根は *nwr*）の意から「輝く者の息子」を意味すると考えられる。アッカド語の「輝く者」*Namraṣit*（*ṣit* は *waṣû*「出る」からの派生名詞）とはシンの形容辞であった（Tallqvist 1938, 387）。ドレイフェルスは *Bar Nemre* を，しばしばシンの息子とされた，古代メソポタミアの光と火の神ヌスクの地方化した呼び名とする（Drijvers 1980, 144）。「犬たちを連れた我が主」*mār d-kalbaw* とは，ドレイフェルスによれば，やはり火星に関連付けられる古代メソポタミアの災厄と冥界の神ネルガルの地方化したものである（Drijvers 1980, 144）。ネルガルはハトラにおいてヘーラクレースと同一視され，3 匹の犬を伴い，典型的なパルティアのゆったりしたシャツを身に着け，装飾品で飾られたズボンをはいた姿で表された［**図 1**］。古代メソポタミア文明期にネルガルと犬の関わりは確認できず，L. ダーベンはネルガルと犬との関係は比較的新しい時代のものとする（Dirven 2009, 48）。

図 1. ハトラ出土の男性神のレリーフ
イスタンブル考古学博物館（Dirven 2009, 371）

タルアタ *Tarʿatā* はシリアの女神 Dea Syria と呼ばれるヒエラポリス-マブグの豊饒女神アタルガティス Atargatis のアラム語の呼び名であった（Green 1992, 59）。ガドラト *Gadlat* はガド *Gad* とアッラート Allāt の 2 語の結び付いた神名と思われる。ドレイフェルスはアラム語の *Gad* は Tychē（ギリシア語で「運」Τύχη の意で，都市の繁栄と運命を司る女神とされる）を意味し，それがハランでの Tychē の機能を司っていた Allāt と結び付けられたのが *Gadlat* という神名であるとする（Drijvers 1980, 44）。アッラートはアラビア語のアッラー Allāh（「神」の意）の女性形，『クルアーン』にも登場する女神の名であり（53: 19），古代からイスラーム黎明期にかけてシリアのパルミュラのような都市や

アラブの人々に崇拝された[8]。

上記の初期キリスト教時代のハランの神々と，ナボニドスのハラン碑文に登場する神々との比較を試みる［表 1］。

表 1. 初期キリスト教時代のハランの万神殿（4-6 世紀）

『アッダイの教え』（4 世紀）	本来の神名	起源
バト・ニッカル	イシュタル	M
太陽	シャマシュ	
月	シン	
『偶像の凋落についての説教』（5/6 世紀）	**本来の神名**	**起源**
シン	シン	M
バアル・シャメン	シン	
バル・ネムレ	ヌスク	
犬たちを連れた我が主	ネルガル＋ヘーラクレース	M+G+P
タルアタ	アタルガティス	S
ガドラト	ガド＋アッラート	S+A

・略号は，M（メソポタミア），G（ギリシア），P（パルティア），S（シリア），A（アラブ）とする。太字・色分けはナボニドス碑文と共通する神々。古代メソポタミアで主流となったアッカド神話の神名を「本来の神名」とする。ただしヘーラクレース，アタルガティスはギリシア語の神名。

『アッダイの教え』『偶像の凋落についての説教』中で言及されているハランの神々とナボニドス碑文では，シン，シャマシュ，イシュタル，ネルガル，ヌスクの 5 神が共通の神として見つかる。このことから，初期キリスト教時代のハランにおける，アッシリア・バビロニア期に成立したシンを頂点とする古代メソポタミア起源の万神殿に大きな変化はなかったようである。

3) イスラーム期

J. B. シーガルは次のように述べている。

> 9，10 世紀のハランの異教徒，所謂サービア教徒は 7 惑星を拝んでいた。しかし彼らは神々の住まいか神々自身である諸惑星は至高者の代行者以上のものではないと信じていた。至高者は諸惑星を宇宙の管理者に指名した。この単一なる神の性質を人の手で記述することはできない。すなわち彼はあまりに偉大で，あまりに遠くにいるので，人間の信仰を要求できない。まことに我々は頂点神信仰 acrotheism ―― 万神殿の頂点に一神が立つシステムのためにもし私が新語を造るとすればだが ―― への傾向を

より早い時期のハランに見出す。すでに前6世紀のナボニドスの碑文の中で，月神シンは他のすべての神々を凌ぐ普遍神の地位に高められた。 (Segal 1963, 12)

古代メソポタミアは多神教の世界であったが，ナボニドスはハランのシンを普遍的な国家神として構想したと思われる[10]。『目録の書』第9章には次のような記述がある。

その人々（＝ハランのサービア教徒）が同意することには，世界には第一原因（＝至高神）がおり，それは消えることがなく，一なるもので，増えもせず，衰えることもない。
(al-Nadīm 2014, 357)

彼ら（＝ハランのサービア教徒）によれば，神は唯一の存在であり，どんな属性も適用されず，神について断定的な陳述もされ得ず，同時にいかなる三段論法も語ることがない。それは，アリストテレースの『形而上学』に述べられている通りである。
(al-Nadīm 2014, 361)

さらに歴史家で地理学者のマスウーディー，アシュアリー派神学者シャフラスターニーal-Shahrastānī (1086-1153)，ディマシュキーが，ハランにおける至高神「第一原因」al-ʻilla al-ūlā の神殿のことを述べている(al-Masʻūdī 1865, 61; al-Shahrastānī 2013, 422; al-Dimashqī 1865, 39)。『目録の書』第9章を含むこれらの記述から，アリストテレースの神である「第一原因」πρώτον κινούν のようなギリシア哲学の影響が推察できる[11]。シャフラスターニーとディマシュキーはハランのサービア教徒が一にして多なる創造主を崇拝していたことを述べ，この神がその本質と永遠性において一なるものであり，眼で見る限りさまざまな形象を取って多様化するために多であるとする (al-Shahrastānī 2013, 420; al-Dimashqī 1865, 44)。これには新プラトン主義の万物の根源たる「一者」τὸ ἕν と，それよりの「流出」ἀπορροή / aporroē または ἀπόρροια / aporroia の観念の影響を窺うことができるだろう (Plotinus 1966, II. 3. 2, 11)。このことから，ナボニドスにより都市の主神から国家的普遍神へと構想されたハランのシンが，ヘレニズム思想の影響を受けて至高の第一原因という神に変容を遂げた，と推測される[12]。この解釈が正しければ，ハランの月神はヘレニズム-ギリシア思想の影響を受けて哲学の域にまで高められ，イスラーム期に生き続けていたことになる。シーガルの指摘するように，第一原因の観念の根底に，古代メソポタミア文明期よりハランの万神殿の頂点に君臨するシンの姿が見出され得るかもしれない。しかしながら『目録の書』第9章は第一原因の登場で始まるものの，この神が直接の崇拝の対象であったとは考え難い。イスラーム期のハランの宗教の全体像を把握するためには『目録の書』『古代諸民族年代記』に登場するハランの神々を検証する必要がある。

以下，『目録の書』第9章とビールーニーの『古代諸民族年代記』第18章中に登場するハランの神々や神的名称について，地名も含めすべて［**表2, 3**］にリスト化し，月神崇拝，

星辰崇拝，偶像崇拝に準じて分類し，配列している。月神を「月神シンと月に関わると思われる神・神霊」，星辰を「シン以外の天体に関わる神々」，どちらとも判断できない偶像を「天体以外の神々・神霊と思われるもの」，その他の霊的存在を「精霊」として4種類に分け，素性の分かるものは，本来の神名と起源を示した。本来の神名とは，古代メソポタミアで主流となったアッカド神話のほかは，原則としてその神が元来属すると思われる神話での名称を採用した。神名は，祭暦を優先した登場順に分類し，通し番号を付している。

ただし，『目録の書』第9章は，「第一原因」の主要な使徒としてアラーニー，アグサーザイムーン，ヒルミース，プラトーンの母方の祖父スールーンの名を挙げ（al-Nadīm 2014, 358），『古代諸民族年代記』第8章は，ハランの預言者あるいは哲学者として，表中のヒルミスとは別のエジプトのヒルミス，アガーザイムーン，ワーリース，フィーサーグールス，バーバー，プラトーンの母方の祖父サワールを挙げるが（al-Bīrūnī 2000, 174），これらは上記の範疇外のものとして除外している。

表2.『目録の書』第9章のハランの神々あるいは神的名称の分類

	神名	本来の神名	起源
月神シンと月に関わると思われる神・神霊			
1	月の神スィーン（＝シン）	シン	M
2	ダイル・カーディー	シンのアキートゥ神殿	
3	サブター（＝スィーニー）	シンの僧院	
4	サラムスィーン	シンの偶像	
5	水の偶像	シン	
6	月なる主	シン	
7	アル ＝ ファクル（＝アル ＝ カマル）	シン	
8	アクールム	シン	
9	第一原因	シン＋一者/第一原因	G＋M
10	神々の主	シン	M
シン以外の天体に関わる神々			
11	イールユース（＝ヘーリオス/太陽）	ヘーリオス＋シャマシュ	G＋M
12	太陽	ヘーリオス＋シャマシュ	
13	バルサー（金星）	ニンリル＋イシュタル	M
14	金星	イシュタル	
15	ハッバーブ・アル ＝ ファーリスィーヤ	ニンガル	
16	ラッバ・アッ ＝ サッル	イシュタル	
17	サーリフ	イシュタル	
18	アシュタル（＝イシュタル）	アシュタル＋イシュタル	U＋M

19	ウズーズ	ウッザー＋イシュタル	A＋M
20	タル・ウーズ	ウッザー（＋イシュタル）の門	
21	盲目の主（火星，悪霊）	ネルガル	M
22	アリース（火星，盲目の神）	アレース＋ネルガル	G＋M
23	ウジュル	ネルガル/ウグル	M/U
24	土星	クロノス＋ニヌルタ	G＋M
25	クルンス（土星）	クロノス＋ニヌルタ	
26	矢を飛ばす神	ミトラ＋ネルガル	P＋M
27	ナービク（水星）	ナブー	M
28	フスフル（完璧なる碩学）	ポリュデウケース/ポースポロス	G
29	クースティール（選ばれし長老）	カストール	
30	バール（木星）	ベール（＝マルドゥク）	M
31	尊厳ある長老（シャイフ）バイル	ベール（＝マルドゥク）	
32	6 つの悪霊	プレイアデス星団	G＋M
33	7 つの神々	7 惑星	M
34	7 惑星	7 惑星	
天体以外の神々・神霊と思われるもの			
35	北（シャマール）	バアル	U＋S＋Pa
36	ター・ウズ	タンムーズ	M
37	タンムーズ	タンムーズ	
38	ハーマーン	バアル・ハモン	Ph＋S
39	ヌムズヤー	ヌスク	M
40	風の翼を持つ者	エンリル	
41	時の主	ズルヴァーン＋クロノス	P＋G
42	ヒルミス	ヘルメース	G
43	平安の息子	バアル	U
44	アル＝ブーグザーリーイーン	ミトラ	P
45	幸運の主	ガド	S＋M
46	アッ＝ラアス		P
47	アルー	アブラハムの父アーザル	M
48	偶像を持つ神々		
49	腹に触れる神		
50	隠れており，また遠くにいるが，身代わりとなる神々と女神たち		
51	神々と女神たち		
52	神々		
53	偶像（アル＝アウサーン）		

54	悪魔（アル=アバーリサ）		
55	ライース・アル=ハムド		
精　霊			
56	シャイターン（サタン）たち		
57	ジン		
58	精霊たち		
59	ジンの神		
60	ジンの長		
61	死者たち		

表 3.『古代諸民族年代記』第 18 章のハランの神々あるいは神的名称の分類

	神名	本来の神名	起源
月神シンと月に関わると思われる神・神霊			
62	月の生命	シン	M
63	ダイル・カーディー	シンのアキートゥ神殿	
64	ダイル・スィーニー	シンの僧院	
65	ハランの主（バイル）	シン	
66	ダフダーク（月の偶像）	シン＋ザッハーク	M＋P
67	ダフダーク（盲目の偶像）	シン＋ザッハーク	
68	ダフダハーク	シン＋ザッハーク	
69	新月の出口の長たち		
70	スマール		
71	サラムスィーン（第 8 章）	シンの偶像	M
シン以外の天体に関わる神々			
72	太陽	シャマシュ	M
73	ムントス		
74	バルサー（金星の偶像）	ニンリル＋イシュタル	M
75	タルサー（※ 1）	ニンリル＋イシュタル	
76	バルター（金星）（※ 1）	ニンリル＋イシュタル	
77	バルヤーン（金星の偶像）（※ 1）	ニンリル＋イシュタル	
78	タル・ウーズ	ウッザー（＋イシュタル）の門	A＋M
79	ダイル・ファターン（金星の偶像）		
80	ブンヤーン（金星の偶像）		
81	火星	ネルガル	M
82	尊厳ある長老（シャイフ）（土星）	クロノス＋ニヌルタ	G＋M

83	ヒルミス（水星）	ヘルメース	
84	スピカ		
天体以外の神々・神霊と思われるもの			
85	サルーガー（＝シャイターンたちの長）	バアル	U
86	バグダード	ミトラ	P
87	タンムーザー	タンムーズ	M
88	粉末	タンムーズ	
89	ジュルーシヤー	ニンガル	P＋M
90	大いなる幸運	ガド	S＋M
91	ティッラサー（＝ティルアサー，アタルガティス）の偶像	アタルガティス	S
92	キリスト降誕の祝祭	キリスト	S＋Pa
93	マール・シュラーマー（※ 2）		
94	ダミース		
95	アミースルフ（洗礼）		
96	バルフーシヤー		
97	バルーフルーシヤー		
98	アル＝クルムース（祝福）		
99	キファルミーサー		
100	ダフルナー		
101	アッ＝ザフバーナ		
102	フーディー・イラーヒー		
103	イラーティー・フーディー		
104	ダームー・ムルフ		
105	ウフスワー		
106	アルマーヤー		
107	アイ		
精　霊			
108	精霊たち		
109	時の主たち		
110	ジン		

・略号はM（メソポタミア），G（ギリシア），U（ウガリト），A（アラブ），P（ペルシア），Pa（パレスチナ），Ph（フェニキア），S（シリア）とし，「/」は「または」を意味する。「＝」のない（　）内は神の別名，あるいはその本質として『目録の書』第9章か『古代諸民族年代記』第18章の記事中で説明されているもの。表3の「サラムスィーン」のみ第8章に登場する旨を（　）内に示している。また空白部分は判断のつかないものである。

※ 1 おそらく，バルサーと同じ。※ 2「聖なる平安」か「平安の神」の意。

以下，［**表 2, 3**］の配列に従う形で論じるが，神々の関連性を述べる必要から，分類，配列順に添っていない場合があり，神名には括弧で括った通し番号を添えている。

先述のように「第一原因」〔9〕はシン〔1〕に通じる神格であった。それ以外にも「月の偶像」〔66〕等，月の名称の付された神名が多く見出され，ギュンデュズによれば「水の偶像」Ṣanam al-Mā'〔5〕もシンのことであった（Gündüz 1994, 154f.）[13]。ダイル・スィーニー Dayr Sīnī〔64〕とはアラビア語で「シンの僧院」の意で，そこでシンの祝祭が行われていた（al-Nadīm 2014, 367; al-Bīrūnī 2000, 285）。また「ハランの主（バイル）」Bayl Ḥarrān〔65〕は新アッシリア時代のアラム語のシンの通り名「ハランの主（バアル）」*b'lḥrn* に一致する[14]。アクールム Aqūrum〔8〕については，ギュンデュズはアブーリム Abū Rim と読み，*Rīmu*[15] がシンの形容辞であることから（Tallqvist 1938, 445）シンに関わる名とする（Gündüz 1994, 155）。さらに「神々の主」Rabb al-āliha〔10〕とはナボニドスのハラン碑文における月神シンの形容辞であった（Ḫarrān Inscription(s) of Nabonidus 1: II 14［Schaudig 2001, 491］）。古代メソポタミアにおいて，ロゴグラムの EN（＝主）はアッカド語で *bēlu*（同じく「主」の意），またロゴグラムの DINGIR^{meš}（＝神々）はアッカド語で *ilū*（あるいは *ilānu*. 同じく「神々」の意）と読まれていた。ナボニドスのハラン碑文の形容辞「神々の主」EN *šá* DINGIR^{meš}（アッカド語読み *bēlu šá ilī* あるいは *bēlu šá ilānī*）から，「神々の主」はナボニドスのハラン碑文に繋がる名称と考えられるだろう。サラムスィーン Salamsīn〔4, 71〕はビールーニーによれば「月（スィーン/シン）の偶像」の意味であり，ハラン近郊のシンに捧げられた聖所であった（al-Bīrūnī 2000, 174）。シリア語の *ṣalmā* が偶像を意味することから，ビールーニーの解釈は正鵠を射ている。

以上から，イスラーム期に至ってもハランにおいて月神が古代メソポタミア文明期以来のシンという名で都市の主神として崇拝を受けていたと思われる。

さらに古代メソポタミア文明期同様，太陽と金星の存在感も健在であった。とりわけ金星を象徴する豊饒女神は地方化し，多様に名を変えて祀られていたようである。頻繁に現れるバルサー Balthā〔13〕は，おそらくアッカド語で「女主」を意味する *bēltu* の地方化したもので，バビロニアの母神 Ninlil，エンリルの妻のことである。彼女は「諸国の女主」*bēlit mātātī*，「神々の女主」*bēlit ilī* と呼ばれ，後にイシュタルと混淆した[16]。シリア語の *barṯā* は「娘」の意であり，アッカド神話によればイシュタルはシンの娘であった。また『目録の書』第 9 章は「アシュタルの息子クッラ」Qurra ibn al-Ashtar（ドッジは al-Ishtar とする）という人物をハランのサービア教徒の長として挙げている（al-Nadīm 2014, 375; Dodge 1970, 769）。アシュタル〔18〕は古代シリアのウガリト（前 1450-1200 頃）の神話において，地上の王となった男性神である（柴山 1983. 4b, 302; Gaster 1961, 126f.）。メソポタミアのイシュタルは女神であり，古代におけるこの神格の複雑さとその崇拝の拡がりが察せられる。

イシュタルと関わり深いタンムーズ〔37, 87〕は，「エゼキエル書」において女たちがこの神のために泣哭する儀式を行っている（8: 14）。『目録の書』第9章にはタンムーズ月（＝グレゴリオ暦6/7月）について次のようにある。

> この月の半ばにアル＝ブーカートの祭りがあり，ブーカートとは泣き女たちのことである。これはター・ウズ，すなわちター・ウズ神のために行われる祭りである。女たちは彼の主がいかにして彼を殺し，その骨を碾臼で砕き，それらを風に撒き散らしたかを嘆く。それで女たちは碾臼で挽かれたものを何も食べず，むしろ湿った小麦，ひよこ豆，棗椰子，乾し葡萄やそれらに似たものを食べる。　(al-Nadīm 2014, 368)

ター・ウズ Tā-Uz〔36〕とは上述のタンムーズと同じ神である（cf. Frazer 1890, 283f.）。この神はシュメル神話のドゥムジ Dumuzi に起源する神であった（月本 2010. 2, 77）。アッカド神話のイシュタル女神と神格を共有するシュメル神話のイナンナ女神は，おそらく冥界を征服しようと冥界下りを行うが果たせず，自らが地上に甦るための身代わりとして不実な夫ドゥムジを差し出す（月本 2010. 2, 71f., 76）。ドゥムジの死を泣哭して嘆く儀礼が古代メソポタミアで行われていたが（月本 2010. 2, 77），それがイスラームの時代に継承されていた。またビールーニーはター・ウズと同時期の粉末 Daqā'iq〔88〕の祝祭を述べるが（al-Bīrūnī 2000, 285），この粉末もタンムーズ神のことと思われる。ター・ウズは殺害され，その骨が碾臼で砕かれて粉末となり，風に撒き散らされたからである。

このため，「破壊の女主」を意味するラッバ・アッ＝サッル Rabba al-Thall〔16〕も，『目録の書』第9章の記事が「タンムーズを殺した」（al-Nadīm 2014, 373）という形容辞を付すところから，イシュタルと判断できる。イナンナ-イシュタルは戦女神であり，「破壊の女主」の名は相応しい。またシリアの豊饒女神タルアタ-アタルガティスもティッラサー Tirrathā〔91〕と呼ばれてカーヌーン・アッ＝サーニー月（＝グレゴリオ暦12/1月）に祝祭日を設けられている（al-Bīrūnī 2000, 284）。「6つの悪霊と共に海岸へ行った」母なるハッバーブ・アル=ファーリスィーヤ Ḥabbāb al-fārisīya〔15〕（al-Nadīm 2014, 373）は，H. レヴィの推測によれば，後述のジュルーシヤー جروشيا（Jurūshiyā）/ جرشيا（Jurushiyā）〔89〕とハッバーブ حباب の綴りのヴァリアントの関連から，同じ神を示していた可能性がある（Lewy 1962, 141 n. 4）。ジュルーシヤーは後述するように，月に関わる神格で，シンの配偶女神ニンガルの可能性が考えられる。「6つの悪霊」Sitta Arwāḥ Shirrīra〔32〕とは，ドッジによれば，プレイアデス星団のことであった（Dodge 1970, 766 n. 105）。サーリフ Ṣāriḥ〔17〕について，ドッジは Ṣāraḥ と読むが，この語は「清澄なる者」を意味し，イシュタルが「輝く女神」「神々の母」と呼ばれていたことに通じるため，金星であるイシュタルあるいはアプロディーテーと思われる（Dodge 1970, 766 n. 103）。『目録の書』第9章の記事は，サーリフが「アル＝ファクルの娘で，子宮から万物が生まれた」とし，古代の豊饒女

神信仰の様子が窺われる。ドッジは al-Faqr（アラビア語で「貧困」の意）〔7〕は間違いで，月を意味する al-Qamar の誤りであろうとする（Dodge 1970, 766 n. 103）。写本の段階で，القمر（al-Qamar）から الفقر（al-Faqr）への綴り間違いが生じたのであろう。イシュタルは月神シンの娘である。ウズーズ ʻUzūz〔19〕はアラブの女神で，『クルアーン』（53: 19）にウッザー ʻUzzā として名が挙げられている[17]。タル・ウーズ Tar-ʻŪz〔20, 78〕というハラン近郊の村で，この女神のための祝祭が行われていたと思われる（al-Nadīm 2014, 364; al-Bīrūnī 2000, 174, 285）[18]。ビールーニーは，タル・ウーズは「金星の門」bāb al-zuhara を意味しているとする（al-Bīrūnī 2000, 174）。ʻUzūz と ʻŪz の語根の関連からタル・ウーズはこの女神の聖所と考えられる。この女神もまた金星に比定される豊饒神であったのだろう。

以上から，イスラーム期のハランにおいて，古代メソポタミア文明期以来のイシュタルの金星と大地の豊饒の性格が保たれていたと判断できる。

『目録の書』第 9 章にはハランの週日が次のように記されている。

> 日曜日は太陽の日であり，太陽の名は，イールユース（＝ヘーリオス）と言い，
> 月曜日は月の日であり，月の名はスィーン（＝シン）と言い，
> 火曜日は火星の日であり，火星の名をアリース（＝アレース）と言い，
> 水曜日は水星の日であり，水星の名をナービク（＝ネボ）と言い，
> 木曜日は木星の日であり，木星の名をバール（＝ベール）と言い，
> 金曜日は金星の日であり，金星の名をバルサー（＝ベールトゥ）と言い，
> 土曜日は土星の日であり，土星の名をクルンス（＝クロノス）と言う。
>
> （al-Nadīm 2014, 366; al-Nadīm 2010, 499f.）[19]

これらの神名は混乱している。古代メソポタミア世界とヘレニズム世界の混淆が窺われる。イールユース Īlyūs〔11〕，アリース Arīs〔22〕，クルンス Qurns〔25〕はギリシアの太陽神 Hēlios，火星神 Arēs，土星神 Kronos がおそらくシリア語風に転訛したものであろう。

ナービク Nābiq〔27〕はアッシリア・バビロニアの知恵と書記の神ナブー *Nabū* で，水星を象徴し，「イザヤ書」（46: 1）に *Nəḇô* と記されている神であろう（cf. Dodge 1970, 755 n. 47）。しかし水星の神はヒルミス〔42, 83〕すなわちギリシアのヘルメース Hermēs の名によっても祀られている（al-Nadīm 2014, 367; al-Bīrūnī 2000, 285）。バール Bāl〔30〕はアッカド語で「主」を意味するベール *bēlu* と同じで，これはバビロンの主神マルドゥクの別名，木星を象徴し，「イザヤ書」（46: 1）では *Bēl* とされる。この神はイスラーム期のハランにおいて「尊厳ある長老（シャイフ）バイル」Bayl shaykh al-waqār〔31〕として星辰信仰の対象となっていた（al-Nadīm 2014, 373; cf. Dodge 1970, 765 n. 100）。しかしながら『古代諸民族年代記』第 18 章の「尊厳ある長老（シャイフ）」〔82〕は土星とされている（al-Bīrūnī 2000, 284）。これは週日の記事から判断すればクロノスと考えられるが，同記事の内容から古代メソポタミアの神

が背後に隠れている可能性が高い。古代メソポタミアにおいて土星とされたのは戦神ニヌルタ Ninurta であった。またシュメルの大神エンリルの名はシュメル語で「風の主」を意味し，ドッジは「風の翼を持つ者」Dhāt janāḥ al-rīḥ〔40〕(al-Nadīm 2014, 373) がエンリルである可能性を述べる (Dodge 1970, 765f. n. 102)。「フスフル Fusfur すなわち完璧なる碩学」〔28〕,「クースティール Qūsṭīr すなわち選ばれし長老（シャイフ）」〔29〕は，ギリシア神話でディオスクーロイ Dioskūroi と呼ばれたポリュデウケース Polydeukēs とカストール Kastōr と思われる[20]。フスフルはギリシアの明けの明星 Phōsphoros の可能性もある (Segal 1953, 108)。ドッジもギュンデュズもこれに類似するものとしてアッカドの *Bilgi* という神を挙げるが (Dodge 1970, 765 n. 101; Gündüz 1994, 153)，正しくはシュメルの火神 ᵈGibil と思われる (Frankena 1957-1971, 384f.)。

また「7 つの神々」al-sab‘a al-āliha〔33〕とは 7 惑星〔34〕のことであろう。『目録の書』第 9 章と『古代諸民族年代記』第 18 章は，アイヤール月（＝グレゴリオ暦 4/5 月）2 日に祭儀の行われる神をそれぞれ，「平安の息子」Ibn al-Salām〔43〕と「サルーガー，シャイターン[21]たちの長」Salūghā Ra’īs al-shayāṭīn〔85〕とする (al-Nadīm 2014, 367; al-Bīrūnī 2000, 285)。ギュンデュズは，サルーガーがシャイターンの長とあるところから，後述する「北」al-Shamāl〔35〕と同じ神とする (Gündüz 1994, 180)。

ハーマーン Hāmān〔38〕はカルタゴの主神バアル・ハモン *Ba‘al Ḥammon* と同起源の神と思われる。おそらく元来は北西シリアのアマヌス Amanus 山（現ヌール山脈 Nur Mountains, トルコ領）の神であったのだろう。「雅歌」ではソロモンの葡萄園がバアル・ハモン *Ba‘al Hāmôn* にあるとされ (8: 2)，この神は古代のシリア＝パレスチナで大きな力を持っていたと考えられる。

ヌムズヤー Numzuyā〔39〕は，明らかにサルグのヤコブの言及したバル・ネムレと同一である[22]。すなわちヌムズヤーはバビロニアの火と光の神ヌスクであった。前 7 世紀，アッシュルバニパル Asshurbanipal 王（在位：前 669-631）に宛てた書簡には，杉で造られた神殿の中でシンが笏杖の上に座し，2 つの王冠を被り，その前にヌスク神が立っている様子が記されている (SAA 10 174)。ナボニドスの母アダド・グッピはシンとヌスクを共に「我が神々」と呼んでいる (Adad-Guppi Inscription(s) 1: I 4 [Schaudig 2001, 502])。ドレイフェルスによれば，ヌスクは「輝く者」シンの息子として新月の光を顕している (Drijvers 1980, 144)。ヌムズヤーがヌスクとすれば，古代メソポタミア文明期以来のシンとヌスクの結び付きがイスラーム期のハランに生き続けていたことになる。

共にティシュリーン・アッ＝サーニー月（＝グレゴリオ暦 10/11 月）に祝祭日を持つ「幸運の主」Rabb al-bakht〔45〕,「大いなる幸運」al-Bakht al-kabīr〔90〕は同じ神格と思われるが，この神は，サルグのヤコブの言及したガドラトに通じる，シリアで崇拝された「運」Tychē を意味するガドであろう (Dodge 1970, 760 n. 73)。

ウジュル Ujur〔23〕について，ドッジはアッカドの農業神ウグル *Ugr* らしいと述べる

(Dodge 1970, 764 n. 93) が，この神はウガリト神話にバアル神の使者として登場する（柴山 1983. 4b, 286, 297f.；cf. Gaster 1961, 126-128)。しかしながら今一つの可能性を提唱したい。ネルガルのロゴグラムは ^{d}GIR$_3$.UNU.GAL であったが，中バビロニア時代（前 1595-1155）以降，徐々に ^{d}U.GUR が使われるようになった。^{d}U.GUR は ^{d}*U-qur* という名で，元来，ネルガルの侍神であったが，古バビロニア時代（前 2004-1595）以降，ネルガルの表記として用いられるようになった（Wiggermann 1998-2001, 216)。『目録の書』第 9 章によれば，ウジュルーネルガルのドームで火星神アリース（=アレース）〔22〕のための儀式が行われていた[23]。古代メソポタミアにおいて，ネルガルは火星を象徴する。火星との関わりから，ウジュルをネルガルと見ることができるのではないか。ナボニドスのハラン碑文でもネルガルは ^{d}U.GUR と表記されている（Ḫarrān Inscription(s) of Nabonidus 1：I 30［Schaudig 2001, 489]）。このようなウガリトまたは古代メソポタミアの伝統がイスラーム期のハランにまで伝わったことは驚嘆に値する。

『目録の書』第 9 章にはニーサーン月にアリース神〔22〕に牡牛が捧げられるとあるが，やはりこの神は火星で，「盲目の神」al-Ilāh al-A‘mā であるとされている（al-Nadīm 2014, 367)。［**表 2**］ではこの 2 つの名をアリース（=アレース）の属性とする。

同じく火星と同一視される「盲目の主」al-Rabb al-A‘mā〔21〕は（al-Nadīm 2014, 373)，「北」〔35〕と共にハランの宗教中で強力な地位にいる。『目録の書』第 9 章中で盲目の主は悪霊 rūḥ shirrīr とも呼ばれている（al-Nadīm 2014, 373)。フヴォルゾーンは，写本段階でアラビア文字の ع（‘）と ح（ḥ）がよく取り違えて書き写されることから，الرب الاعمى（al-Rabb al-A‘mā）ではなく الرب الاحمى（al-Rabb al-Aḥmā）が正しい綴りであるとし，そうなると盲目の主ではなく，「最も赤く燃える主」と意味が変わる。赤色は殺戮や不毛を意味するものであり，このような性格はネルガルに当てはまる（Chwolsohn 1856, vol. 2, 188；Green 1992, 155)。盲目の主は先述の「アリース（火星，盲目の神）」〔22〕と同一視しうる神ではあるが，［**表 2**］では「悪霊」を属性とする形で別の神とする。

「北」〔35〕は「最も偉大な主」al-Rabb al-A‘ẓam と呼ばれ，ジンとシャイターンを従えて祀られ，『目録の書』第 9 章中に幾度も言及されている（al-Nadīm 2014, 368f.)。ハランでは，女，奴隷，奴隷女の息子，気の触れた者は，北の密儀と呼ばれる儀式には参加できない（al-Nadīm 2014, 368)。F. キュモンによれば，ウガリトの人々は，この神をシリアのセレウキア・ピエリアの大港に近いカシウス山（ウガリトの 50 km程北）に住むバアル神と考えていた（Cumont 1963, 104；Dodge 1970, 918)。「出エジプト記」（14：2, 9)，「民数記」（33：7）に，この神のための場所である *Ba‘al-ṣəpôn* が記されている（cf. Dodge 1970, 918)。ツァフォンはウガリト語で北のカシウス山の名で，そこに技芸神コシャルがバアルの宮殿を建てた，と神話にある（柴山 1983. 4b, 295-297；Gaster 1961, 118f.)。そのためこの神は「ツァフォンのバアル」と呼ばれた。こうした神話観念が『旧約聖書』に取り込まれ，ヘブライ語では二次的にツァフォンは「北」という意味になった（Donner and Röllig 1973, 68)。

シュメル・アッカド人によれば，神々は北に住まっている。『目録の書』第9章には，ハラン人は霊智を求めるため，祈る方向を北極星に定めるとある（al-Nadīm 2014, 358）。

アルー Arū〔47〕については，ドッジは『クルアーン』(6: 74) にあるアブラハムの父アーザル Āzar のことであろうとする（Dodge 1970, 766 n. 108）。ハランにアブラハムが滞在したという伝説が生きていたのだろう[24]。ビールーニーはカーヌーン・アル=アウワル月（=グレゴリオ暦11/12月）24日に「キリスト降誕の祝祭」'īd al-mīlād〔92〕が行われることを述べている（al-Bīrūnī 2000, 284）。

アッ=ラアス al-Ra's〔46〕とはアラビア語で「頭」を意味する。『目録の書』第9章によれば，マアムーンはハラン人のことを「アッ=ラアスの信徒」aṣḥāb al-Ra's と罵倒し，またハラン人は，人の胴体からちぎり取った頭（アッ=ラアス）を水星の影響を受けた予言等を告げるものとして崇めていたという（al-Nadīm 2014, 362-365）。フヴォルゾーンは，マニ教徒がハランの祝祭で殺され，その斬られた頭が崇拝されていたとマアムーンが伝聞したため，そのような罵倒の言葉を投げつけた可能性があるとする（Chwolsohn 1856, vol. 2, 130-132）。イスラーム期には，ハランに若干名のマニ教徒が在住していたし，同教徒はマアムーンの父のアッバース朝第5代カリフ・ハールーン・アッ=ラシードの治世（796年）に反乱を起こしたため，マアムーンの怒りを買っていた。アッ=ラアスについてはペルシア起源のマニ教の影響が推察される。

「時の主」Rabb al-sā'āt〔41〕は，グリーンによれば，古代ペルシアの神で，オールマズドとアハリマンの父であるズルヴァーン（Zurvān，アヴェスタ語で「時間」を意味する zurvan に由来する）やギリシアのクロノス（Χρόνος，「時」の神格化した神）に関わる神名のようである。メソポタミアのネルガルの図像には，ズルヴァーンのごとく，ライオンの頭をして翼があり，全身を蛇に巻き付かれている姿のものがあるが，それはメソポタミアとペルシアの接触の所産であった（Green 1992, 198f.）。

ダフダーク Ḍaḥḍāk〔66, 67〕は，「月の偶像」Ṣanam al-qamar，「盲目の偶像」Ṣanam a'mā の別名を持ち，アイヤール月（=グレゴリオ暦4/5月）11日にはジュルーシヤー Jurūshiyā〔89〕と祝祭を分かち合っている（al-Bīrūnī 2000, 285）。そのためジュルーシヤーも月に関わる神格の可能性がある。グリーンによれば，ダフダークはペルシアのザッハーク Ḍaḥḥāk であり，3つ頭のドラゴンの姿の魔物で，フィルダウスィー Firdawsī の『王書』*Shāh nāma*（1010完成）では肩に2匹の蛇を宿らせる暴君として登場する（Green 1992, 198）。

「矢を飛ばす神」al-ilāh alladhī yuṭayyiru al-nushshāb〔26〕（al-Nadīm 2014, 367）には，グリーンによれば，大いなる狩猟者としてのペルシア神話の英雄神ミトラ Mithra の影響が見て取れる。『アヴェスタ』はミトラの射手としての見事な腕前を記しているが，それは矢を燃やして疫病と死をもたらすネルガルのイメージを反映したものであった（Green 1992, 200f.）[25]。中東のセム語族とペルシアの千年以上に亘る文化的接触は，互いの伝統に影響を与え合っていた。またアル=ブーグザーリーイーン al-Būghdhārīyīn〔44〕は若者

の通過儀礼と思われる密儀を司る神であり，ミトラの密儀の影響が見出される[26]。

上記のことを，ナボニドスのハラン碑文に登場する神々と比較する。[**表 2, 3**] をナボニドスのハラン碑文中の 11 の神々と比較すると，シン，シャマシュ，イシュタル，ネルガル，エンリル，ニンガル，ヌスクの 7 神が確認できると思われる。[**表 1**] では，初期キリスト教時代に，シン，シャマシュ，イシュタル，ネルガル，ヌスクの 5 神が確認されることを鑑みるに，ナボニドス以後メソポタミアを支配したペルシア，ギリシア等の影響も見られるものの，古代メソポタミア文明期に遡る月神の主神としての存在感とそれに伴うシュメル・アッカドに起源する古代メソポタミアの神々の信仰形態は，ハランにおいてイスラームの時代までほぼ保たれていたと言えるだろう。しかし「北」のような古代シリアの神々も強い影響力を持っている。

以上，古代メソポタミア文明期と初期キリスト教時代，イスラーム期の 3 時代を通じてハランの万神殿の変遷をたどってみた。結論としては，ハランの月神シンを頂点とする古代メソポタミアに起源する伝統的万神殿の本質に変化はなかったものと思われる。しかしハランの宗教には複数の宗派，宗教伝統が共存していたことが推察される。その考察を進めるために，次にハランの祭暦を検討する。

IV. 祭暦

『目録の書』第 9 章第 1 部には，「供物に関して私（＝イブン・アン＝ナディーム）が読んだ，キリスト教徒のアブー・サイード・ワフブ・イブン・イブラーヒーム Abū Sa‘īd Wahb ibn Ibrāhīm[27] の手書きによる写本」(al-Nadīm 2014, 366) という表題の項目において，ハランの新年はシリア暦ニーサーン月であるとし (al-Nadīm 2014, 366)，この月から 12 ヶ月のハランの祭暦が述べられている。一方，『古代諸民族年代記』第 18 章の祭暦については，ムハンマド・イブン・アブド・アル=アズィーズ・アル=ハーシミー Muḥammad ibn ‘Abd al-‘Azīz al-Hāshimī[28] という人物が『完璧なもの』*al-Kāmil* という作品の中で，サービア教徒の祝祭を短く記しており，著者のビールーニーは，他の典拠も加えながら，それを転載したとしている (al-Bīrūnī 2000, 283f.)。ただし後者の祭暦は『目録の書』第 9 章とは異なり，ハランの新年はユダヤ暦と同じ，シリア暦のティシュリーン・アル=アウワル月としている (al-Bīrūnī 2000, 283)。情報元とされる人物の名から『目録の書』第 9 章の祭暦をワフブ・カレンダー，『古代諸民族年代記』第 18 章の祭暦をハーシミー・カレンダーとする。以下，両カレンダーの内容を表にした [**表 4**]。ただし，ワフブ・カレンダー中のティシュリーン・アル=アウワル月 25 日の「妊娠の祝祭」，カーヌーン・アル=アウワル月とカーヌーン・アッ=サーニー月 23 日の「誕生の祝祭」とタンムーズ月 29 日「祝祭」は，『目録の書』第 9 章の「アフマド・イブン・アッ=タイイブがキンディーから情報を得て伝えた手稿の中の物語」(al-Nadīm 2014, 357) から，ニーサーン月 20 日の「水の

偶像の儀式」は「ハラン異教徒についての他の人物の記述」（al-Nadīm 2014, 373）の項目から得た情報を加えたものである。

ワフブ・カレンダーはニーサーン月から始まっているため，ハーシミー・カレンダーもそれに合わせる。表中左端の列の1行目には対応するグレゴリオ暦の月を，2行目以下には日を示す。両カレンダーとも天体の月に関わると思われる祝祭は太字にして末尾に（☽）の印を付し，共通の祭儀と思われるものを薄く彩色した欄内に示した。

表4. 『目録の書』第9章と『古代諸民族年代記』第18章のハランの年間の宗教儀礼

ニーサーン

3/4	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
1-3	女神バルサー（金星）のための祝祭。	
2		ダミースの祝祭。
3		瞼墨の祝祭。
4		富の増大。
5		バルヤーン（※おそらくバルサーのこと）金星の偶像の祝祭。
6	**月の神のため牡牛を生贄にする。（☽）**	**・スマールと月の生命の祝祭。（☽）** **・ダイル・カーディーの祝祭。（☽）**
8	**・30 日間の月のための断食がこの日に終わる。（☽）** **・7つの神々，盲目の主，シャイターン（=サタン）たち，ジン，精霊たちのための祝祭。7つの神々のために7匹の子羊を，盲目の主のために1匹の羊を，シャイターンの神々のために1匹の子羊を焼く。**	**・大断食の終わり。（☽）** ・精霊たちの誕生の祝祭。
9		時の主たちの祝祭。
15	北の密儀。太陽を礼拝。	スピカの諸密儀の祝祭。
20	**ダイル・カーディーの儀式（=水の偶像の儀式?）。牡牛の1頭をクルンス（=クロノス）神に捧げ，さらに1頭をアリース（=アレース）神に捧げ，月（スィーン=シン）に1頭の牡牛を捧げる。7頭は7つの神々に，1頭はジンの神に，1頭は時の主に捧げる。（☽）**	**ダイル・カーディーでの集会の祝祭（=水の偶像の儀式?）。（☽）**
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。**	

	(☽)	
28	**サブター（=スィーニー）村の聖域の儀式。多くの牛を，ヒルミス（=ヘルメース）神のために殺し，9頭の子羊を7つの神々とジンの神，時の主のために殺す。(☽)**	**ダイル・スィーニーの祝祭。(☽)**

アイヤール

4/5	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
1	「北」の密儀に供物を捧げ，太陽を礼拝。	
2	平安の息子のための祭りと誓約。	サルーガー（すなわち）シャイターンたちの長の祝祭。
3		バグダードの家の祝祭（=アル=ブーグザーリーイーンの家の祝祭？）。
4		誓いの祝祭。
6		アミースルフすなわち洗礼の祝祭。
7		**ダフダークすなわち月の偶像の祝祭。(☽)**
11		**ダフダハークとジュルーシヤーの祝祭。(☽)**
12		ジュルーシヤーの祝祭。
13		バルフーシヤーの祝祭。
15		バルーフルーシヤーの祝祭。
17		麦藁の門の祝祭。
20		**・完璧なるダフダークの祝祭。(☽)** ・タル・ウーズの祝祭。
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。(☽)**	

ハズィーラーン

5/6	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
7		哀悼と号泣でタンムーザーを記念する。
24		アル=クルムースすなわち祝福の祝祭。
27	・矢を飛ばす神のために，北の密儀を行って太陽を礼拝し，魔術的儀式を行う。 **・ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。(☽)**	屠殺者の家の祝祭。

タンムーズ

6/7	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
15		若者の祝祭。
月半ば	泣き女たち（アル＝ブーカート）の祭り。ター・ウズの死を嘆く。	
17	男たちによる，ジン，シャイターンたち，神々のための北の密儀。ハーマーンのために9頭の子羊を殺し，ヌムズヤーに捧げ物をする。	粉末の婚礼の祝祭。
18-19		粉末の祝祭。
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。（☽）**	
29	祝祭。	

アーブ

7/8 月	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
月の8日間	神々のための新酒作り。ハラン人はその酒をさまざまの多くの名で呼ぶ。3 人の祭司が偶像を持つ神々のために生まれた幼児を犠牲に供する。	
3		ダイルファターン，金星の偶像の祝祭。
7		同じくダイルファターンの祝祭。
24		サルグの温泉での沐浴の祝祭。
26		同じ祝祭。
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。（☽）**	
28		キファルミーサーの祝祭。
30		サルグでの沐浴の終わり。

アイルール

8/9	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
月の3日間	ジンの長のための北の密儀。沐浴。	
13		・女たちのための家々の柱の祝祭。

		・断食の終了。
14		ダフルナーの断食。
24		**新月の出口の長たちの祝祭。（☽）**
25		ハランの丘での蠟燭の祝祭。
26	山での儀式。太陽，土星，金星の向き合いの位置を観察する。幸運の主への誓いを立てた者は，鶏を幸運の主へ送る。	
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。（☽）**	
27-28	北の神とシャイターンたち，ジンのための密儀。	

ティシュリーン・アル=アウワル

9/10	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
6		アッ=ザフバーナの祝祭。
7		祝祭の儀式の始まり。
13		フーディー・イラーヒーの祝祭。
14		イラーティー・フーディーの祝祭。
15		籤引きの祝祭。
月半ば	死者たちのために食物を調える。	
25	妊娠の祝祭。	
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。（☽）**	

ティシュリーン・アッ=サーニー（ティシュリーン・アル=アーハル）

10/11	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
1		大いなる幸運の祝祭。
2		マール・シュラーマー。
4-18		天幕の祝祭。
5		頭を剃るためのダームー・ムルフの祝祭。
9		バルサー。金星の偶像。
17		タルサー（※おそらくバルサーと同じ）の祝祭。
18		サルグの祝祭。
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。**	

	（☽）	
29	21 日間の断食の最後の日（最後の9 日間は「幸運の主」のため）。	

カーヌーン・アル=アウワル

11/12	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
4-11	バルサーのための諸儀式。	
7		ブンヤーン，金星の偶像への呼びかけの祝祭。
9	9 日間の断食の始まり。	
10		火星のための諸偶像の祝祭。
20		ジンの祝祭。
21		最初の断食の始まり。次の新月の日に終わる。この期間，肉食が禁じられる。
23	誕生の祝祭。	
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。（☽）**	
28		ジンへの呼びかけの祝祭。
29		ジンのための嘆きの祝祭。
24		キリスト降誕の祝祭。
30	ライース・アル=ハムドの月の始まりの儀式。	諮問の祝祭。

カーヌーン・アッ=サーニー（カーヌーン・アル=アーハル）

12/1	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
1		新年の祝祭。
4		山の家とバルター（金星）の祝祭。
8		7 日間の断食。15 日に終わる。
12		ウフスワーへの呼びかけ。
20		**ハランの主への祈り。（☽）**
23	**誕生の祝祭。（☽）**	
24	**月なる主の生誕日。（☽）**	
25		ティッラサー（※ティルアサー，アタルガティス）の偶像の祝祭。
26		一年の花婿たちの祝祭（※婚姻のこと）。

27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。（☽）**	

シュバート

1/2	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
9	太陽のための 7 日間の断食，初日。	最も小さな断食の初日。
10		太陽のための花嫁の家の祝祭。
15	断食の終わり。	
16		断食が明ける。
22		太陽のためのムントスの祝祭。
24		尊厳ある長老（土星）の祝祭。
25		アルマーヤーの花婿たちの祝祭。
27	**ダイル・カーディーに赴き，月であるシン神のために供物を殺し，焼き，食べ，飲む。（☽）**	

アーザール

2/3	ワフブ・カレンダー	ハーシミー・カレンダー
1		アイの断食。3 日間続く。
4		断食の終わり。
7		ヒルミス（水星）の祝祭。
8	**月のための断食の始まり。（☽）**	**大断食の始まり。（☽）**
10		子供たちの離乳。
28	ウジュルのドームでアリースのための儀式。	
30	神々と女神たちの結婚。7 つの神々の名を呼び，パンの欠片といくらかの塩を，腹に触れる神に捧げる。	

・同日に複数の祭儀が行われる場合は「・」を用いて分けて記している。「=」なしの（　）は，祭暦の記事中の内容を示している。
・丸括弧内の「ティシュリーン・アル＝アーハル」「カーヌーン・アル＝アーハル」はハーシミー・カレンダーの呼び名である。

［**表 4**］を踏まえ，分析する。ワフブ・ハーシミー両カレンダーには一見あまり一致点がない。例えばワフブ・カレンダーは 1 年の始まりをニーサーン月とし，ハーシミー・カレ

ンダーはティシュリーン・アル＝アウワル月から始まる。ビールーニーは次のように述べる。

> 彼ら（＝ハランのサービア教徒）の教義を記す人々の一人は述べている。毎月 17 日に彼らは祝宴を行い，その原因は月暦 shahr al-hilāl 恒例の氾濫 ṭūfān の始まりであり，2 つの昼夜平分時（＝春分，秋分），2 つの至（＝夏至，冬至）の日々にもまた彼らは祝宴を行う，と。冬至は，年 sana の誕生日 mawlid である。 (al-Bīrūnī 2000, 286)

この記事によれば，ハランの暦は太陰暦であった。氾濫とは満潮時の大潮のことであろうが，陰暦であれば朔から 17 日ではなく 15 日のはずである。あるいは 17 日が月の欠け始める頃であることと関わりがあるのかもしれない。ナボニドスのハラン碑文は，バビロニア暦第 7 月のタシュリートゥ *Tašrītu* 月（＝グレゴリオ暦 9/10 月）17 日をシンが温情を示す日としている（Ḫarrān Inscription(s) of Nabonidus 1: II 13-14 [Schaudig 2001, 491]）。またアッシリア王サルゴン Sargon2 世（在位：前 722-705）宛の書簡は，ハランで月は不明だが 17 日に月神のための祝祭が行われていることを述べている（SAA 1 188）。『目録の書』第 9 章がニーサーン月を 1 年の始まりと述べているのは春分を新年と見なしていたためであろう。それは古代メソポタミアの伝統に即している。太陰暦のバビロニア暦ニサンヌ *Nisannu*（＝グレゴリオ暦 3/4 月）は 1 年の始まりの第 1 月とされていた。『古代諸民族年代記』第 18 章のほうは，ユダヤ暦の第 7 月ティシュリー *Tishrei*（＝グレゴリオ暦 9/10 月）を新年とするユダヤの伝統との関わりが考えられる[29]。バビロニア暦第 7 月タシュリートゥについて，*tašrītu* とはアッカド語で「始まり」「開始」を意味し，秋分から一年が始まる，という観念があったことが暗示されている。ビールーニーは，ハランのサービア教徒が月々をシリア語名で呼び，それに関してユダヤ人を模倣していたと述べる（al-Bīrūnī 2000, 283）。

またハーシミー・カレンダーはカーヌーン・アル＝アーハル月 1 日に「ルームの暦のように 1 年の始まりの祝祭をする」（al-Bīrūnī 2000, 284）とする。グリーンによれば，この日は冬至直後の新月の日であった（Green 1992, 149）。太陽が死に，夜の最も長い冬至の後の新月の日は月神シンの都市ハランの新年に相応しい。このような矛盾はハランにおいて複数の宗教伝統が共存していたため生じたのであろう。上記引用のビールーニー自身のコメントでは，冬至がハランでは年の誕生日であり，1 年の始まりであった。またビールーニーは，ユダヤ人とハラン人は，太陽の動きから 1 年を，月の動きから 1 ヶ月を定め，彼らの祝祭と断食の日を月齢によって調整するが，同時に 1 年の内に収めると言う（al-Bīrūnī 2000, 13f.）。カーヌーン・アッ＝サーニー月には両カレンダーに，日の近い 20 日と 24 日に「ハランの主（バイル）への祈り」と「月なる主の生誕日」があり，冬至後の月神関連の儀式が続いていたことが推測される。

このように見ていくと，ワフブ・カレンダーとハーシミー・カレンダーは不一致なばか

りではないようである。両カレンダーにおいては，さまざまの慣習や宗教伝統がハランに共存していることが見て取れ，根本では一致するところも見つかる。両カレンダーとも，シュバート月 9 日に断食が始まり，7 日間続いて 15 日に終わり，16 日に明ける。断食中，脂ものを食べないことも一致する（al-Nadīm 2014, 371; al-Bīrūnī 2000, 284）。またアーザール月 8 日に大きな断食が始まり，1 ヶ月後のニーサーン月 8 日に明ける。同じ日に精霊の祝祭をするところも変わらない。ニーサーン月 20 日のダイル・カーディー[30]での儀式，28 日の聖域での祝祭も一致する。

両カレンダーは修正し合うことも可能である。ター・ウズ-タンムーズの祭儀は，ワフブ・カレンダーでは泣き女たちの祭りとしてタンムーズ月半ばに行われるとしているが，ハーシミー・カレンダーでは，ハズィーラーン月 7 日がタンムーザーの儀式となっている。ハズィーラーン月よりもタンムーズ月こそがター・ウズ-タンムーズ神の祭月であったろう。III 章 3 節で示したように，タンムーズ月に行われるワフブ・カレンダーのター・ウズの死を嘆く祝祭とハーシミー・カレンダーの粉末の祝祭は同一と考えられ，ター・ウズの骨が碾臼で砕かれるという穀物を思わせる記述から，収穫祭の様子を彷彿とさせる。カーヌーン・アル=アウワル月については，バルサー-金星のための祝祭は両カレンダーで一致する。さらに 30 日に行われるワフブ・カレンダーの「ライース・アル=ハムドの月の始まりの儀式」とハーシミー・カレンダーの「諮問の祝祭」は同じ祝祭と考えられる。『目録の書』第 9 章によれば，この儀式においてハラン人たちは，ハランにある大モスクとキリスト教の教会の破壊と古来の宗教の復活を願っている（al-Nadīm 2014, 371）。

またワフブ・カレンダーには，ハランでは太陰暦で毎月 27 日に人々が聖所のダイル・カーディーへ行き，月神シンのために供物を殺し，焼き，食べ，飲む，とある（al-Nadīm 2014, 372）。このダイル・カーディーの儀式の記述は，グリーンによれば，ワフブ・カレンダーが古代メソポタミアの月信仰に強く結び付いている証左であった（Green 1992, 153）。ハーシミー・カレンダーのほうは，月に関する儀式は記すが，ダイル・スィーニーという名称でしかシンの名に触れていない。ともあれ 27 日のダイル・カーディーの儀式とは死にゆく月の甦りを祈念するものであったろう。だがハーシミー・カレンダーにも注目すべき月信仰の証左が見つかる。同カレンダーでは，通常のシリア暦の月名の前にヒラール hilāl という語を付けている。例えばニーサーン月は通常のシリア暦ではニーサーン Nīsān だが，冒頭にヒラールを付けてヒラール・ニーサーン hilāl Nīsān とするのである。これはワフブ・カレンダーでは見られない。ヒラールがアラビア語で「三日月」「新月」を意味することから，ハーシミー・カレンダーの月を重要視する性格が知れるだろう。

V. 結論

ここまで古代メソポタミア文明期，初期キリスト教時代，イスラーム期のハランの万神

殿と，イスラーム期のハランの祭暦を考察した。これより次のことが言えるだろう。

ハランの宗教は，前6世紀のナボニドスの頃までに月神シンを最高神と仰ぐ万神殿が構想され，その後ハランの政治的凋落やペルシア，ヘレニズム，ユダヤの影響の下，さまざまの解釈が生じたため複数の宗教伝統が生まれた。イスラーム期に至ると，サービア教徒を名乗るようになったハラン人の下，シンは古来の形で祀られると同時に第一原因への変化をも遂げ，イシュタルはさまざまの名でもって呼ばれ祀られるようになり，「北」のような古代シリア起源の神々も強い影響力を残していた。

ワフブ・ハーシミー両カレンダーの示す多様な祭儀は古代メソポタミア文明期よりイスラーム期までのハランを支配した政治勢力等の影響と複数の宗教伝統の共存を表している。しかしながら両カレンダーとも，月神シンのハランにおける優位性を示してもいた。ハラン3千年の歴史を鑑みるに，ハランとハランの宗教の真のしたたかさは，多様な宗教伝統を受け入れながら，古代メソポタミア文明期以来の月神信仰を核として守り抜いたことにあると言えよう。バグダードで活躍したハランのサービア教徒の背後にはこのような古代の伝統が息づいていたと思われる。

［注］

＊ アッカド神話の月神名の片仮名表記は「スィン」が原音に近いが，慣例に従って本論では「シン」とし，アラビア語文献の場合のみ「スィーン」とする。

＊ 神名のローマ字転写は，慣例によりシュメル語は立体，アッカド語は斜体とし，アラビア語以外のセム語は斜体にする。ギリシア語・ラテン語・アヴェスタ語などは立体にする。

＊ 本文・表・注の括弧内の「＝」は，引用者による補足である。

＊ 表中の「※」は，作成者による傍注である。

(1) ムスリム間のサービア教徒についての多様な説についてはGündüz 1994, 16-52参照。

(2) 『目録の書』にはマアムーンal-Ma'mūn（アッバース朝第7代カリフ。在位：813-833）の怒りを逸らすためにハラン人が「サービア教徒」を名乗った経緯が記されている（al-Nadīm 2014, 362-364）。

(3) al-ḥunafā'の単数形はḥanīfであり，アラビア語では一般に「真の信仰を持つ者」「偶像崇拝を否定する者」を意味するが，シリア語では*ḥanpā*が「不信心者」「異教徒」を意味することに留意するべきであろう。

(4) ナボニドスのハラン碑文はḤarrān Inscription(s) of Nabonidus 1［Schaudig 2001, 486-499］を参照する。

(5) 「シンとイシュタルの言葉によって」*ina a-mat*rd30'*u*$^{d+}$INANNAとは，イシュタルがシンの意を受けて，ナボニドスのもとに各国の王から恭順と平和の使者が送られて来るよう計らったことを述べていると思われる。

(6)　^{d}*Anu* はシュメル語の「天」を意味する神 ^{d}AN のアッカド語名。「その（＝シンの）名はアヌの三日月刀である」TUKUL ^{d}*A-nù zi-kir-šu* とは，太陰暦の月始めに天に浮かぶ細い月を比喩したものと思われる。

(7)　「天のあらゆるすべての祭儀秩序」（*nap-ḫar gi-mi-ir pa-ra-aṣ* AN-*e*）. *napḫaru* は「全部の，全体の」，*gimru*（*gimir* は結合形）は「すべての」の意。この類似した意味の 2 つの形容詞を続けて用いることでシンの偉大さを強調したかったものと思われる。

(8)　Ningal は古代シリアの都市国家ウガリトでは *Nikkal* と呼ばれた（柴山 1985. 4a, 342-345）。

(9)　イブン・アル=カルビーIbn al-Kalbī（737-819）の『偶像の書』*Kitāb al-Aṣnām* によれば，アッラートは四角い岩で，クライシュ族始めアラブのすべてが彼女を崇拝していた（Ibn al-Kalbī 2011, 46）。

(10)　H. シャオディヒはナボニドスのシン崇拝，特にハランの月神崇拝を「単一神教的シン崇拝」henotheistische Verehrung Sîns とする（Schaudig 2001, 9）。

(11)　原因から原因へ探究を進めてゆくと，遂にはその根本原理である「第一原因」πρώτον κινούν に到達し，それは自ら動かされずに他を動かすところのものであるが，これがアリストテレースの神である（Aristotle 1935, XII）。ビールーニーもハラン人が一神教を明言し，諸悪を超越した神を信じていたとする（al-Bīrūnī 2000, 174）。

(12)　ハランの宗教へのヘレニズム思想の影響に関して，ユスティーニアーヌス Justīniānus 1 世（在位：527-565 年）のアカデメイア閉鎖により，シンプリキオス Simplikios ら 7 人の哲学者たちがペルシアに亡命し，その後ハランに滞在したらしいことが要因の一端とも考えられる（Hadot 2007, 43f.）。

(13)　『目録の書』第 9 章に引用されている水の偶像の祝祭はバビロニアの新年祭 *Akītu* 祭に似ている。アキートゥ祭とは「古くは，主要な季節的祝祭もしくはそれが行われる神殿をも意味したが，前一千年紀には，最も重要な季節祭である新年祭を意味するようになった」（月本 1996. 1, 31 n. 7）。

(14)　「ハランの主（バアル）」については Keel 1998, 68 参照。

(15)　*rīmu* はアッカド語で月神の随獣である「牡牛」か「贈り物」を意味する。

(16)　ギュンデュズはアッカド語の *bēltu* と結合形の *bēlit* の区別ができていない。しかも後者を独立形として扱っている（Gündüz 1994, 144）。ドッジも同様の表記を採用している（Dodge 1970, 755, 761）。

(17)　ハランの預言者バーバーは ʻUzūz の神殿と思われる ʻAzzūz で神聖売春が行われ，生贄が捧げられていたことを告げている（Dionysius Bar Ṣalībī 1904, 49f.）。

(18)　ビールーニーによれば，その祝祭日はアイヤール月 20 日であった（al-Bīrūnī 2000, 285）。

(19)　本論で主たる校訂本として用いているロンドン版は火星の神と土星の神を Lāryus, Qirqis とするが（al-Nadīm 2014, 366），ベイルート版は Arīs, Qurns とする（al-Nadīm 2010, 500）。ギリシアの Ἄρης, Κρόνος との関連から火星の神と土星の神の名はベイルート版を採用する。

(20)　ドッジ Fusfur を Phosphor, Qūṣṭīr を Castor としている（Dodge 1970, 765 n. 101）。

(21)　shayṭān はサタン（＝悪魔）のこと。shayāṭīn はその複数形。

(22) ギュンデュズは نمزيا の ز (z) を ر (r) としてこの神の名を nmryā と読んでいる (Gündüz 1994, 153)。そうであればアッカド語の「輝く」を表す語根 *nmr* に一致する。

(23) 「(アーザール月) 28 日にウジュルのドームに行き，そこで子羊と雄鶏，多くの鶏をアリース (＝アレース) 神――彼は火星である――のために殺し，焼く」(al-Nadīm 2014, 372)。

(24) マスウーディーはハランのラッカ Raqqa 門の側にアブラハムの父アーザルの神殿マグリーティヤー Maghlītiyā があったことを記している (al-Mas'ūdī 1865, 62f.)。

(25) 「列王記下」(13: 14-19) と「エゼキエル書」(26: 27) の矢占いの記事も参照。

(26) 通過儀礼を受ける若年者たちは犬，鴉，蟻を兄弟とするとされ，これらはミトラ神話や密儀にとり重要なシンボルであった (Green 1992, 204)。この密儀は「勝利者の家」bayt al-qāhir で行われたが，ミトラは「勝利者」「征服されざる者」と呼ばれ，その場所はミトラの聖所を意味した (Dodge 1970, 770 n. 122)。キュモンによれば，ミトラは古代メソポタミアの太陽神シャマシュに同化された (Cumont 1963, 135f.)。

(27) H. ヒャルペは，アッバース朝第 23 代カリフ・ムティーウ al-Muṭī' (在位：946-74) の宰相アブー・ジャアファル・イブン・シルザード Abū Ja'far ibn Shirzād の秘書の可能性を示唆する (Hjärpe 1974-1975, 71)。

(28) この人物はムスリムであろうと考えられる。ムハンマドの出身家系ハーシム家の人物かもしれない。

(29) バビロニア暦はニサンヌが第 1 の月で，基本は春分からだが，太陰暦のため，年によって元日は大きく変わる。6 年に一度は閏月を導入し，1 年 13 ヶ月とした。「エレミヤ書」は第 9 月を冬としていることから (36:22) 古代イスラエルはバビロニア捕囚以前にバビロニア暦を受容していたと思われ，ティシュリーはその第 7 月である。バビロニア暦を受容する前は秋を年初めとする暦であったとされ，ユダヤ教では後に，ティシュリーを正月とする暦に代えて (元に戻して？) 今日に引き継がれている。

(30) Dayr Kādī はアラビア語で「カーディーの僧院」の意。カーディー Kādī の語はアキートゥ *Akītu* から来ている可能性がある (Dodge 1970, 767 n. 111)。

［参照文献］

《略号》ARM 26/1＝Durand 1988; *RIA*＝*Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie*; SAA 1＝Parpola 1987; SAA 10＝Parpola 1993.

《1 次資料》

■ アラビア語

al-Bīrūnī, Abū al-Rayḥān Muḥammad ibn Aḥmad, 2000: *al-Āthār al-Bāqiya 'an al-Qurūn al-Khāliya*, Khalīl 'Imrān al-Manṣūr (ed.), Beirut.

al-Dimashqī, Shams al-Dīn Abū 'Abd Allāh Muḥammad, 1865: *Nukhba al-Dahr fī 'Ajā'ib al-Barr wa al-Baḥr*, M. A. F. Mehren (ed.), St. Petersburg.

Ibn al-Kalbī, 2011: *Kitāb al-Aṣnām*, Aḥmad Zakī Bāshā (ed.), Beirut.

al-Mas'ūdī, Abū al-Ḥasan 'Alī ibn Ḥusayn, 1865: *Murūj al-Dhahab wa Ma'ādin al-Jawhar*, vol. 4, C. Barbier de Meynard (ed.), Paris.

al-Nadīm, Muḥammad ibn Isḥāq, 2010: *al-Fihrist*, Yūsuf 'Alī Ṭawīl (ed.), Beirut.

al-Nadīm, Muḥammad ibn Isḥāq, 2014: *Kitāb al-Fihrist*, vol. 2, Ayman Fu'ād Sayyid (ed.), London.

al-Shahrastānī, Abū al-Fatḥ Muḥammad ibn 'Abd al-Karīm, 2013: *al-Milal wa al-Niḥal*, Sa'īd al-Ghānimī (ed.), Beirut.

■ アッカド語

Durand, J.-M. 1988: *Archives épistolaires de Mari I/1*, ARM 26/1, Paris.

Parpola, S. 1987: *The Correspondence of Sargon II, Part I: Letters from Assyria and the West*, SAA 1, Helsinki.

Parpola, S. 1993: *Letters from Assyrian and Babylonian Scholars*, SAA 10, Helsinki.

Pongratz-Leisten, B. 1995: "Anzû-Vögel für das É. ḪÚL. ḪÚL in Ḫarrān," in U. Finkbeiner et al. (eds.), *Beiträge zur Kulturgeschichte Vorderasiens: Festschrift für Reiner Michael Boehmer*, Mainz, 549-557.

Schaudig, H. 2001: *Die Inschriften Nabonids von Babylon und Kyros' des Großen: samt den in ihrem Umfeld entstandenen Tendenzschriften: Textausgabe und Grammatik*, Münster.

月本昭男（訳）1996. 1:『ギルガメシュ叙事詩』岩波書店.

■ ウガリト語

柴山栄（訳）1983. 4a:「ニッカルと月の結婚」『古代オリエント集』杉勇・三笠宮崇仁編, 筑摩書房, 342-345.

柴山栄（訳）1983. 4b:「バアールとアナト」『古代オリエント集』杉勇・三笠宮崇仁編, 筑摩書房, 275-312.

■ ギリシア語

Aristotle 1935: *Metaphysics*, H. Tredennick (trans.), Cambridge, Massachusetts and London.

Plotinus 1966: *Ennead*, vol. 2, A. H. Armstrong (trans.), London and Cambridge, Massachusetts.

■ シリア語

Bar Hebraeus 1890: *Gregorii Barhebraei chronicon syriacum: e codd. mss. emendatum ac punctis vocalibus adnotationibusque locupletatum*, Paris.

Dionysius Bar Ṣalībī 1904: *Studia Syriaca, seu, collectio documentorum Hactenus Ineditorum ex Codicibus Syriacis*, Ignatius Ephraem II Rahmani (trans.), Monte Libano, 48-50.

Jacques de Saroug/M. Martin (ed.) 1876: "Discours de Jacques de Saroug sur la chute des Idoles," *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 29, 107-147.

Phillips, G. (ed.) 1876: *The Doctrine of Addai, the Apostle*, London.

《2 次資料》

Beaulieu P.-A. 1989: *The Reign of Nabonidus, King of Babylon 556-539 B.C.*, New Haven and London.

Chwolsohn, D. A. 1856: *Die Ssabier und der Ssabismus*, 2 vols, St. Petersburg.

Cumont, F. 1963: *Les religions orientales dans le paganisme romain*, Paris.

Dirven, L. 2009: "My Lord with His Dogs: Continuity and Changein the Cult of Nergal in Parthian Mesopotamia," in L. Greisiger et al. (eds.), *Edessa in hellenistisch-römischer Zeit: Religion, Kultur und Politik zwischen Ost und West: Beiträge des internationalen Edessa-Symposiums in Halle an der Saale, 14.-17. Juli 2005, Beiruter Texte und Studien*, vol. 116, Beirut.

Dodge, B. (trans.) 1970 [1998]: *The Fihrist: A 10th Century AD Survey of Islamic Culture*, Chicago.

Donner, H. and W. Röllig 1973: *Kanaanäische und aramäische Inschriften*, vol. 2, Wiesbaden.

Drijvers, H. J. W. 1980: *Cults and Beliefs at Edessa*, Leiden.

Ebeling, E. 1928a: "Adad," in *RIA*, vol. 1, Berlin and Leipzig, 22-26.

Ebeling, E. 1928b: "Anu," in *RIA*, vol. 1, Berlin and Leipzig, 115-117.

Ebeling, E. 1938: "Enki (Ea)," in *RIA*, vol. 2, Berlin and Leipzig, 374-379.

Frankena, R. 1957-1971: "Girra und Gibil," in *RIA*, vol. 3, Berlin and New York, 383-385.

Frazer, J. G. 1890: *The Golden Bough: The Roots of Religion and Folklore*, vol. 1, London.

Gaster, T. H. 1961: *Thespis: Ritual, Myth, and Drama in the Ancient Near East*, New York.

Green, T. M. 1992: *The City of the Moon God: Religious Traditions of Harran*, Leiden, New York and Köln.

Gündüz, Ş. 1994: *The Knowledge of Life: The Origins and Early History of the Mandaeans and Their Relation to the Sabians of the Qur'ān and to the Harranians*, Oxford.

Hadot, I. 2007: "Dans quel lieu le néoplatonicien Simplicius a-t-il fondé son école de mathématiques, et où a pu avoir lieu son entretien avec un manichéen?," *The International Journal of the Platonic Tradition* 1, 42-107.

Hjärpe, J. 1974-1975: "The Holy Year of the Harranians," *Orientalia Suecana* 23-24, 68-83.

Keel, O. 1998: *Goddesses and Trees, New Moon and Yahweh: Ancient Near Eastern Art and the Hebrew Bible*, Sheffield.

Krebernik, M. 2009-2011: "Sonnengott. A. I," in *RIA*, vol. 12, Berlin and Boston, 599-611.

Lewy, H. 1962: "Points of Comparison between Zoroastrianism and the Moon-Cult of Ḥarrān," in W. B. Henning and E. Yarshater (eds.), *A Locust's Leg: Studies in Honour of S. H. TAQIZADEH*, London, 139-161.

Nötscher, F. 1938: "Enlil," in *RIA*, vol. 2, Berlin and Leipzig, 382-387.

Segal, J. B. 1953: "Pagan Syriac Monuments in the Vilayet of Urfa," *Anatolian Studies* 3, 97-119.

Segal, J. B. 1963: *Edessa and Harran*, London.

Seidl U. 1976-1980: "Inanna/Ištar," in *RIA*, vol. 5, Berlin and New York, 74-89.

Streck, M. P. 1998-2001: "Nusku," in *RIA*, vol. 9, Berlin and New York, 629-633.

Tallqvist, K. 1938: *Akkadische Götterepitheta*, Helsinki.

Wiggermann, F. A. M. 1998-2001: “Nergal. A. Philologisch,” in *RIA*, vol. 9, Berlin and New York, 215-223.

Zgoll, A. et al. 1998-2001: “Ningal A.-B,” in *RIA*, vol. 9, Berlin and New York, 352-359.

江原聡子　2021. 3:「新アッシリア時代におけるハランの月神崇拝――石碑に見る図像と碑文を中心に」『オリエント』63/2, 135-148.

月本昭男　2010. 2:『古代メソポタミアの神話と儀礼』岩波書店.